

ふと、ふりかえると。（名波弘彰先生退職記念）

著者	名波 弘彰
雑誌名	文学研究論集
号	26
ページ	1-3
発行年	2008-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/99612

ふと、ふりかえると。

名 波 弘 彰

娘に言わせると、父の私はオタクだそうだ。筑波に赴任するまで東京にいて、雑踏する都会の中では自分自身は群衆の一人でよかったから、自身をふりかえることがなかったのだろう。それに東京教育大学の院生だったころから、ほぼ 30 年ぐらい土曜日ごとに東京で仲間と中世の仏教、神道、文学といった、いまからいうと超領域的な研究会を開き、議論し合ってきたこともあって、まさかオタクなぞと呼ばれる人間ではなかったはずだ。でも、ふと、ふりかえてみると、実は〈仲間〉以外の周囲の人々とは距離を置いてきたし、70 年代の大学紛争以来の習性で、講義室よりも喫茶店が私の研究室だった。温かいコーヒー一杯と一冊の本があれば幸せだった。いまでもそれは変わらない。娘はそんな私を見つけていたのかもしれない。娘の断言はもっともだと娘の見る眼に妙に感心してしまった。

私が筑波大学で、まあ、少しは役に立ったかと思われることは、一般・比較専攻の留学生、それに風変りな（言いすぎかな）日本人学生を指導したことぐらいかもしれない。オタク的で、人見知りする幼児性がついに抜けることのなかった私は、この大学に赴任してからしばらくすると、一人の留学生が眼にとまった。当時彼は学問上で指導教官と折り合いが悪く、悩んでいた。中世文学専攻の国費留学生だった。講師の私は妙に親近感をおぼえた。本格的に指導したのは彼が最初だった。留学生を持ち上げるわけではないけれど、彼らは日本語で学術論文を書く能力を持っていた。学術論文を書くという能力は、たんに文章を書くのとはちがう。彼らは二重の困難をのりこえるだけの能力をもっている。私はそれをひきだしてやればよかった。

そのとき、役立ったのが東京での研究会の経験だった。仲間内のこと、同じ目標をめざしている。どこで行き詰まっているのか、どう構想したらよいのか、どこを突き抜けたら展望が開けるのか、以外にも私にはそんな感覚を身に付けていた。私は彼らに自分の問題意識や方法を押しつけたことはない。だからといって、放って置くこともしない。私はどうやら講義よりも、ゼミ向きの教師であつたらしい。最初の指導学生は博論を書き上げ、いまでは本国の学界で活躍している。そのおかげで、多くの留学生が私のもとに集まってくれるようになった。でも、いまではそれぞれに本国に帰ったりして、その顔を見ることはめったにない。名簿のなかになつかしい笑顔が刻み込まれているだけだ。

能力のある学生はそれぞれに豊かな個性をもっている。指導以外のところでの彼らとの交流はそれまでの経験にはなかったことで、新鮮で楽しい思い出となっている。私は、最初から彼らに博士号を取得させることを目的にした。それはいまは亡き私の師を最初の留学生の博論審査にお招きしたとき、長文の巻物風のお手紙で教えてくださったことだった。当時、師は外国の大学の博論審査の依頼を数多く受けていて、その経験を伝えてくださった。文学領域ではまだわずかしかな博士号が出なかったことのことだ。師はつねに師だった。

そう、風変りな日本人学生のことふれておこう。一般・比較文学という領域のなかで日本文学を担当した教師は何人かいらしかったが、それまではほんの二、三人の学生が教師の専門にみちびかれるにすぎなかった。最初のころ、私のところにも古典を学ぶ学生が一人いただけだった。幸いに、彼もやっと学位を取って外国の大学で教鞭をとっていて、いまでも付き合いをつづけてくれている。ところが、あるとき、同時に三人の日本人の若者が日本近代文学を専攻するために、この一般・比較文学に入ってきた。風変りだったが、考えてみると、そのころ、国文学には閉塞性が感じられていたし、それに構造主義以後の、きわめて普遍的な文化・文学批評理論が日本文学でも注目され、内向きの国文学にも採り入れる必要のある時代となっていた。それを彼らは奇しくも同じように感じていたのだ。私は一応指導教官というかたちで付き合い、彼らも私からは、その理論ではなく、論文の表現法を学んでくれた。理論は私の任ではなかった。彼らは従来の国文学のパラダイムなどまったく気にもせず、メタ・テキスト、異文化表象、日本語文学、文学の越境性などをめざした。いまではありふれた用語だが、日本文学からすると、まったく思いも寄らないことで、彼らが何か新鮮な領域を切り拓こうとしていることだけは予感された。ふと、ふりかえてみると、彼らの眼は国内ではなく、東アジアにおける日本、異国から見た日本というフィールドの学術化を試みていたのだ。私は彼らに特殊と普通のダイナミズムをもって日本文学の未来を切り拓こうとしているのをまのあたりに見ることができた。

願うことは、いまは研究者になっている彼らが同じく研究者となっている留学生仲間と国際学術交流のための恒常的組織を構築してもらいたいということだ。そんな組織と方向性のなかで次の世代の内外の学徒を教育してほしい。学問は個を超えて連続のうちにある。ふと、ふりかえると、そんな〈場〉を一般・比較文学は準備していたのかもしれない。それは私の過去の仕事だったというだけではなく、今後にもゆだねられているのだろう。

私がこの大学で少しは仕事をしたといえるのは、その準備をしたことだった。私は過去と未来に感謝したい。過去の師の思い出は私の胸に、そしていま未来の学問

を切り拓こうとしている私の指導学生にバトンを伝えることが果たしてできただろうか……と。

2007 年 11 月 14 日